

100年企業を訪ねて

～長寿企業のたゆまぬ努力とその魅力に迫る～

File 05 / 齋藤工業株式会社

建築一筋100周年

街をつくり、人を育てて目指す、次の100年



齋藤 恵介

齋藤工業株式会社
取締役社長

1948年、さいたま市(旧浦和市)生まれ。日本大学を卒業後、竹中工務店に勤務し、1978年同社に入社。1996年、3代目として事業を承継すると共に一般社団法人さいたま市建設業協会の会長などを歴任し、2014年10月からさいたま商工会議所常議員。

齋藤悠美子

齋藤工業株式会社
取締役社長室長

1982年、東京都世田谷区生まれ(さいたま市(旧浦和市)出身)。フェリス女学院大学大学院博士前期課程修了。海事法務業を15年間営む。2014年入社、2023年4月から同社取締役社長室長に就任。

浦和競馬場、さいたま市庁舎、浦和コルソなど、さいたまに縁のある人なら誰もが知る大型プロジェクトを、多数手掛けてきた齋藤工業株式会社。2024年4月にちょうど100周年を迎え、現在は浦和駅西口で進む再開発を主導する同社の歩みと、次代に託す理念を、3代目社長・齋藤恵介氏にインタビューした。

続けます。1960年代に埼玉県で初となるゼネコンとのJVを成功させ、1970年代にはコンピュータによる総合管理システムを導入するなど、変化をいとわず先進的な経営に挑戦し続けた2代目でした。

社員の成長と地域貢献で、発展しつづける会社に

「性行 資性篤実 人格円満にして公德心に富み 指導力抜群」と社内外から慕われた父の跡を、私が継いだのは1996年。大学卒業後、ゼネコンで外勤・内勤の経験を7年間詰んで家業に戻った私は、社長室に所属して経営ノウハウを学んでいました。

バブル期やリーマンショックなど、波乱の時代を当社が乗り越えられたのは、多角経営に走らず「建築一筋」を貫いてきたから。そして同時に「人と業界を育て、経営革新を続けてきた」からではないかと私は思っています。

初代は戦後の復興期を担うべく、地域の建設業者の共栄を願って埼玉県建設業協会の発起人となり、新たな工法の勉強会なども立ち上げました。2代目もその意思を継ぎ、県内のみならず社団法人全国建設産業団体連合会会長という大任を務めています。

3代目である私も、人を育て、人に報いることが会社の礎であるという理念は同じです。100周年を迎えられたのも、これまでの従業員一人ひとりの努力があってこそ。当社で働いているから得られる学びと刺激を社員に贈るため、後継者である齋藤悠美子取締役を筆頭に、全社員を対象としたドバイへの研修旅行を実施しています。あわせて行った社屋の全面改装も、社員が快適に働き、能力を十分に発揮できる環境への投資と考えています。

「建築一筋 100周年」。ぶれない方針を掲げて社員と仕事の質を高め、地域に貢献することで、齋藤工業は発展していく。私はそう信じています。

まさに街をつくる仕事。創業100周年を記念し、浦和駅西口再開発の現場で撮影されたポスター。



一世一代の大工事で、官の齋藤、の評価を確立

当社は1924年に、私の祖父である齋藤雄吉によって設立されました。故郷・会津若松から単身上京し、浅草の土建会社で修行した後に独立。「齋藤工業所」を浦和に立ち上げました。

堅実に実績を積み上げていた当社が、一躍名を馳せることになったのが、1948年に請けおった浦和競馬場の建設工事です。現在の金額に換算すると数百億円に及ぶ建設資金を立替える条件付き案件でしたが、これを見事にやり遂げたことで、学校や公営住宅など官庁の仕事が次々に受注することになります。埼玉エリアで「官公庁といえば齋藤、という評価を固めた、祖父にとって、まさに一世一代の大仕事となりました。



初代畢生の大事業となった浦和競馬場の建設。“官の齋藤、として一躍名を上げることに。

先進的な経営感覚で、事業を成長させた2代目

1962年、祖父の逝去にともなって、父・齋藤裕が2代目となります。すぐに着手したのは法人への改組。それまで約40年、職人気質な祖父の意向で個人経営にこだわってきましたが、高度成長期を迎えて事業はぐんぐん成長しており、やはり近代的な会社組織への進化が求められるタイミングでした。

齋藤工業株式会社へと生まれ変わった当社は、浦和市庁舎や上尾運動公園体育館、そして皆さまご存知のさいたま商工会議所会館など、公的な施設を数多く受注し、着実に成長を